

複合動詞「V+ ダス」の解釈

高橋 葉子

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-*dasu*”

Yoko Takahashi

This paper presents a conceptual semantic account of various aspectual interpretations of the Japanese V1+V2 compound verb V-*dasu*. In addition to the inception of single event and a multiple event readings observed in the past literature, I argue that V-*dasu* also means an inception of plural period repetition reading and one of single period repetition reading. The single event reading is observed in cases in which V1 is inherently atelic. Other three interpretations are forced when V1 event is telic. I claim that *dasu* can be represented by a set of aspectual functions and demonstrate how these four interpretations are derived by the principles of semantic computation on the conceptual structures within the framework proposed by Jackendoff(1991, 1996). I argue that aspectual features of V1 event must be compatible with constraints on an application of the functions that constitute the meaning of *dasu*. If V1 events are atelic, the functions of which the meaning of *dasu* consists are directly applicable to the conceptual structure of V1. On the other hand, if V1 events are telic, the entire meaning of V-*dasu* is forced to be a multiple event reading by an application of a function that denotes plurality. This function is introduced by lexical elements such as an adverbial modifier *mainichi* or an application of “rule of construal” (Jackendoff 1991). This explains the fact that the telicity of V1 plays a central role in determining the meanings of V-*dasu*.

キーワード：*V+ ダス，* 開始，* 単数解釈，* 複数解釈，* 有界性，* 解釈規則，
* 概念構造

0. はじめに

「ダス」を第2項とする複合動詞「V+ ダス」(以下、V-*dasu*)は、第1項(以下、

言語科学研究第13号（2007年）

V1)に、非対格自動詞、非能格自動詞、他動詞の全てが出現可能であり、複合動詞の中でも非常に生産性が高い。この *V-dasu* には2つの解釈があり、「ダス」が単独の他動詞「出す」の語彙的意味とほぼ同じ「外部への移動」という解釈(1)とアスペクト形式として「V1事象の開始」を表す(2)がある。両者は、影山(1993)が派生の違いから、それぞれ、語彙的複合動詞と統語的複合動詞と分類している。

(1) 語彙的複合動詞

- a. 倉庫から商品を運び出した
- b. チューブから絵の具を搾り出した

(2) 統語的複合動詞

- a. 太郎が走りだした
- b. 太郎は最近太りだした
- c. 伝染病で次々と子供が死にだした

本稿では上記のうち、(2)の「V1事象の開始」を表す統語的複合動詞を取り上げ、その解釈の検討と概念構造による分析を行っていく。従って、以下、本稿での「*V-dasu*」は、統語的複合動詞を表すこととする。

V-dasu の解釈についての先行研究には、金田一(1950/1976)による動詞分類を基準に、*V-dasu* のV1に出現する動詞を分類した、長嶋(1976)、寺村(1984)、姫野(1999)などがある¹。これらの先行研究の見解は、姫野(1999:96)の、『「だす」は、動作・作用の開始を表すわけだから、結合する動詞は、『開始—継続—終了』の時間の経過を有する動詞、いわゆる継続動詞と言われているものとなる。但し、瞬間動詞であっても、主体が複数であったり、動作・作用が繰り返される場合には、結合することもある。』という説明に集約されている。

本稿は、先行研究の見解が、*V-dasu* の解釈の一部分についてのみ言及したものであり、*V-dasu* の解釈における主体数と事象数は、事象アスペクト解釈における、有界性、過程、変化などの概念によって表される、V1の事象タイプによって決定されることを示す。さらに複数解釈となる場合に複数化される要素は、V1事象タイプの違いによって決定されることを明らかにする。そして、

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-*dasu*”

V-*dasu* の解釈において行われている意味計算を、Jackendoff(1996)において提案された「構造保持束縛理論」(structure-preserving binding)による概念構造を用いて分析を試みる。

1. V-*dasu* の単数解釈と複数解釈

V-*dasu* の解釈を、本稿の分類に従って(3)～(6)に示す。例文に示してある[継]と[瞬]は、下線部の動詞、つまり V-*dasu* の V1が、それぞれ継続動詞、瞬間動詞²であることを表す。すると確かに V1が継続動詞の(3a)は単数解釈であり、瞬間動詞の(6)は複数解釈となっている。しかし、(3b)は V1が瞬間動詞であっても単数解釈となり、(4)と(5)は、V1が継続動詞であっても複数解釈となっている。つまり、先行研究の指摘の通りに解釈されるものは、(3a)と(5a,b)のみであり、先行研究の見解は、V-*dasu*の一部の解釈の指摘に留まったものである考えられる。

- (3) 単数解釈 (= (2a,b))
 - a. 太郎が走りだした [継]
 - b. 太郎は最近太りだした [瞬]
- (4) 複数解釈：複数期間反復の開始
 - a. 太郎は毎日ジムで走りだした [継]
 - b. 幸子は毎朝新聞を読みだした [継]
- (5) 複数解釈：単一期間反復の開始
 - a. 風でブランコが揺れだした [継]
 - b. 小刻みに体が震えだした [継]
- (6) 複数解釈：多発的事象の開始
 - a. 伝染病で次々と子供が死にだした [瞬] (= (2c))
 - b. イルミネーションが点きだした [瞬]

複数解釈となる(4)～(6)の主体数と事象数について見ておく。(4), (5)は、単一主体、複数事象解釈で、このような事象には、「複数期間反復」と「単一期間反復」があるが、前者は「複数期間反復」、後者は「単一期間反復」である。

言語科学研究第13号（2007年）

一方(6)は、主体と事象の両方が複数解釈される。ただしこの場合、1つの主体に対する事象は1である。そのような事象が複数存在するという解釈から、結果として、多発的な事象の開始という解釈になる。

上原(2003)は、シテイル文の持つ反復解釈である「複数期間反復」と「単一期間反復」が、シテイルが接辞化する文の事象タイプによって決定されると議論し、それぞれの概念構造を提示しているが、本稿でもそれを受け入れ、「ダス」が接辞化する事象タイプによって *V-dasu* 全体の解釈が決定される概念的なメカニズムを明らかにする。以下、*V-dasu* の解釈を上記のように、単数解釈と3タイプの複数解釈に分類し、それぞれの解釈の V1 事象を検討し、V1 の事象タイプを特定していく。

2. 理論的枠組み

Jackendoff(1996)において提案された「構造保持束縛理論」(structure-preserving binding)による概念構造は、事象の展開には、対象、属性、時間の3つの要素が関与しているが、文全体の事象構造は、これら3つの要素の相互関係において決定されることから、事象構造内におけるこれらの関係性を、共通の概念素性や概念関数を用いて要素ごとに記述し、ひとつの概念構造に統合して表示するというものである。構造保持束縛理論で採用されている概念素性と概念関数は、Jackendoff(1991)において設定されたものであるため、本節ではまず、Jackendoff(1991)において設定された概念素性と概念関数を用いた概念構造による、物体や事象の定義法を概観し、次に「解釈規則(rule of construal)」が適用される条件を示す。そして Jackendoff(1996)で提案された構造保持束縛理論を概観し、その後の研究で導入された概念関数と、それによって修正された構造保持束縛構造を示す。

2.1 概念素性

Jackendoff(1991)は、有界性(boundedness)と内部構造(internal structure)という2つの概念素性を提案し、2つの素性の組み合わせによって、全ての名詞を定義することが可能であるとしている。有界性とは、物質や物体の形状に、本質的な境界線を認識するかしないかを弁別する素性で、ほぼ可算名詞と不可

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-dasu”

算名詞の区別に対応し、内部構造とは、その物質や物体が、複数の同じ個体で構成されているか否かを弁別する素性である。さらに Jackendoff(1991)は、この名詞の定義法を事象の定義に拡張している。有界性と内部構造という2つの概念素性を導入することにより、名詞と事象を(7)のように単一の概念素性で定義することが可能となるのである。

(7) 概念素性による名詞と事象の定義

概念素性の定義	名詞	事象
+b, - i	individuals (a pig)	a closed event (<i>John run to the store</i>)
+b, + i	groups (a committee)	a bounded iterative event (<i>The light flashed until dawn</i>)
- b, - i	substances (water)	an unbounded homogeneous process (<i>John slept</i>)
- b, + i	aggregates (buses, cattle)	an unbounded iterative process (<i>The light flashed continually</i>)

(Jackendoff1991:20をもとに作成)

2.2 概念関数

概念関数は、物体と事象を定義する概念素性を変換することにより、ある物体や事象を、異なるタイプの物体や事象に写像するという機能を持っている。Jackendoff(1991)は、PL(plural)、ELT(element)、COMP(composed of)、GR(grinder)、CONT(containing)、PART(partitive)という6種類の概念関数を定義している。(8)は、これらの機能と関係性をまとめて示したものである。

(8) 概念関数の素性変換機能と関係性

	関数名	素性変換	関数名	素性変換	関数名	素性変換
内包関数	PL	[+b] → [-b,+i]	COMP	[-b] → [+b]	CONT	部分→全体
抽出関数	ELT	[-b] → [+b]	GR	[+b] → [-b]	PART	全体→部分

このように概念関数は、内包関数(including function)と抽出関数(extracting function)という相対する概念を持つ関数に分類されている。そして、これら6種類の概念関数は、PLとELT、COMPとGR、CONTとPARTが対をなし、

言語科学研究第13号（2007年）

それぞれの前者が内包関数、後者が抽出関数という互いに逆関数の関係となっている。ここでは、本稿の事象分析に関与している PL と COMP の2つの関数が事象に適用された場合について簡潔に述べておく。

PL は複数化関数で、 $[+b]$ 事象に適用され、それを $[-b, +i]$ 事象に変換する。PL が適用された事象は、非有界的な反復事象を表す。一方 COMP は有界化関数で、 $[-b]$ 事象に適用され、それを $[+b]$ 事象に変換する。COMP が適用された事象は、非有界事象が時間的な限界点を与えられ、有界事象に変換されたことを表す。

2.3 次元性と方向性

物体の本質的な形状の次元性 (dimensionality(DIM)) は、点 $[DIM0d]$ 、線 $[DIM1d]$ 、面 $[DIM2d]$ 、立体 $[DIM3d]$ の4種類の次元性によって捉えられる。この定義を事象に拡張すると、点的事象(point-event)は、 $[DIM0d]$ 、継続時間のある事象は、 $[DIM1d]$ となり、 $[DIM2d]$ 以上の事象は概念的に存在しない。

さらに、 $[DIM1d]$ の物体や事象は、方向性 (directionality(DIR)) という素性によって分類される。例えば、ベクトルや矢のように、方向性を示す物体は $[DIM1dDIR]$ で表されるのに対し、方向性を持たないただの線は、 $[DIM1d]$ のみで表される。一方、事象の方向性は、時間の進行を捉える概念となる。従って、継続時間のある事象は $[DIM1dDIR]$ となる。ここで問題になるのが $[DIM0d]$ の点的事象であるが、Jackendoff(1991)は、 $[DIM0d]$ の事象についても、例えば、その時間が認識できないほど短くても、事象であるからには、開始から終了という事象の方向性を認めなければならないとし、 $[DIM0dDIR]$ と表している。

さらに Jackendoff(1991)は、 $[+b, -i, DIM1d]$ の有界断面の属性を表す関数として、BD(BOUNDED)と BDBY(BOUNDED BY)³という関数を導入している。BD と BDBY は、有界断面に対する視点の違いを表し、BD は有界するものの側から、BDBY は有界されるものの側からの視点であることを表す。また有界断面には2つの属性があり、物体であれば上と下、左と右が区別され、事象であれば開始点と終了点が区別される。これらの区別は－と＋で記述され、(9)の概念構造で表示される。

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-dasu”

- (9) a. “an X that terminates (+) or originates (-) Y”

$$= \left[\begin{array}{c} X \\ +b, -i \\ \text{DIM}0(+\epsilon)d \\ \text{BD}^{\pm} \left(\left[\begin{array}{c} Y \\ +b, -i \\ \text{DIM}1d\text{DIR} \end{array} \right] \right) \end{array} \right]$$

- b. “a Y that has X as a terminus (+) or origin (-)”

$$= \left[\begin{array}{c} Y \\ +b, -i \\ \text{DIM}1d\text{DIR} \\ \text{BDBY}^{\pm} \left(\left[\begin{array}{c} X \\ +b, -i \\ \text{DIM}0(+\epsilon)d \end{array} \right] \right) \end{array} \right]$$

(Jackendoff1991:35)

(9a)は、X という $[+b, -i \text{ DIM}0(+\epsilon)d]$ の有界断面が $[+b, -i, \text{DIM}1d\text{DIR}]$ の Y を限界づけていることを表しており、(9b)は、 $[+b, -i, \text{DIM}1d\text{DIR}]$ の Y が、X という $[+b, -i \text{ DIM}0(+\epsilon)d]$ の有界断面によって限界づけられていること表している。つまり、事象の開始、終了は、 BD^{\pm} の項に事象の概念構造を挿入することによって表示される。従って、事象の開始(始動相)の概念構造は、(9a)の BD^{-} によって表される。本稿は(9a)の概念構造に基づき、開始を表す「ダス」の概念構造を BD^{-} であると仮定し、V-dasu の概念構造を分析していく。

2.4 解釈規則

2.2 で示した概念関数は、文中の語彙的要素によって適用される場合と、「解釈規則(rule of construal)」によって適用される場合がある。「解釈規則」とは、事象解釈において、文中の語彙的要素のみでは、文全体が表す意味と動詞が表す意味に不整合が生じ、解釈不能に陥るような場合、語彙的要素で表されていないある一定の解釈が強制される事によって解釈を可能にする作用である。

次の文は、文中に反復事象を表す語彙的要素が存在しないにもかかわらず「ライトが夜明けまで何度も点灯し続けていた」という事象の反復解釈が強制され

言語科学研究第13号（2007年）

ている。

(10) The light flashed until dawn. (Jackendoff1991:15)

この文全体は、*until dawn* というこの事象の時間的終了点を表す PP によって有界化されていることから、過去のある一点に始まり、ある程度時間的長さを持って継続した後に終了する [+b] 事象と解釈される。この有界化は、COMP の機能であり *until dawn* は、次のような概念構造によって表される。

(11) *until dawn*

$$\left[\begin{array}{c} +b \\ [\text{DIM } \text{IdDIR}] \\ \text{COMP} \left(\left[\begin{array}{c} X \\ \text{Sit} -b \end{array} \right] \right) \\ \text{Sit BDBY}^+ ([\text{Time DAWN}]) \end{array} \right]$$

一方、*the light flashed* (「ライトが点灯する (ついて消える)」) という事象は、瞬間的な有界事象で [+b, -i] によって表される。そして、この事象は、概念構造において、COMP の項、つまり [X] に挿入される。しかし、COMP が適用されるのは [-b] 事象でなければならないので、(10) は、動詞が表す事象の有界性と、文全体で表される事象の有界性に不整合が生じ、文字通りの解釈では非文法になる。このような場合に文が解釈不能に陥るのを回避するため、解釈規則によって、PL 関数が導入され、[+b, -i] が [-b, +i] に変換される。それによって、*the light flashed* という事象が反復事象と解釈されるのである。これは、概念構造では、(12) のように表示される。

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-*dasu*”

(12) the light flashed (反復事象解釈)

$$\left[\begin{array}{c} -b, +i \\ \text{PL} \left[\begin{array}{c} +b \\ [\text{DIM 1d DIR}] \\ \text{LIGHT FLASH} \end{array} \right] \end{array} \right]$$

このように、事象の(非)有界性は、このような概念的な操作によって、整合的な、概念的意味計算が正しく行われるようになる。Jackendoff(1991)は、(10)の概念構造を、以下のように示している。

(13) The light flashed until dawn.

$$\left[\begin{array}{c} +b \\ [\text{DIM 1d DIR}] \\ \text{COMP} \left[\begin{array}{c} -b, +i \\ \text{PL} \left[\begin{array}{c} +b \\ [\text{DIM 1d DIR}] \\ \text{LIGHT FLASH} \end{array} \right] \end{array} \right] \\ \text{Sit BDBY}^+ ([\text{Time DAWN}]) \end{array} \right]$$

(Jackendoff1991:41)

2.5 構造保持束縛理論 (*structure-preserving binding*)

Jackendoff(1996)は、まず3次元の管(tube)やH鋼(H-beam)のような物体は、その物体の2次元の断面(cross-section)とそれに対して垂直な1次元の投射軸(axis)で定義されるとし、次のような概念構造を示している。

(14) a. Tube:

$$\left[\begin{array}{c} [1d] \\ \parallel \\ 2d \\ \text{Annulus shape} \end{array} \right]$$

b. H-beam:

$$\left[\begin{array}{c} [1d] \\ \parallel \\ 2d \\ \text{H-shape} \end{array} \right]$$

(Jackendoff1996:319)

言語科学研究第13号（2007年）

次に、物体の形状の定義法を、事象の定義に拡張する。継続時間がある事象の次元性は1dであり、その断面は、時間の概念を持たない0d 事象の状態である。このような時間軸上の時の一点における事象の断面は、(15)のように表示される。

(15)

$$\left[\begin{array}{c} \text{Od} \\ \text{BE} \left(\left[\begin{array}{c} \text{Thing} \\ \text{Space} \end{array} X \right], \left[\begin{array}{c} \text{Od} \\ l_i \end{array} \right] \right); \left[\begin{array}{c} \text{Od} \\ t_i \end{array} \right] \end{array} \right]$$

(Jackendoff1996:321)

これは、対象 X が、時間軸上のある時点 t_i に、ある場所 l_i に存在していることを表している。つまり、事象の断面は「事態 (situation)」、「空間 (space)」、「時間 (time)」の3要素で構成されており、事象の推移は、この3要素が相同的に投射されることで表される。この3本の投射軸は独立したものでなく、「事態」の投射軸上で、ある1点が選ばれると、「空間」と「時間」の投射軸上の点も相同的に決定され、「事態」「空間」「時間」全ての投射軸上の点が一致する。つまり、事象の開始点では、空間も時間も開始点にあり、事象進行に従って「空間」と「時間」も進み、事象の終了点が「空間」と「時間」の進行の終了点となる。この様に構造保持束縛理論では「事態」「空間」「時間」が互いに束縛し合いながら相同的に投射していく。概念構造上では、3本の投射軸の相同関係を、上付のギリシア文字を用いて表示する。(16) は、この表記法で移動事象を表したものである。

(16)

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d]^\alpha & [1d]^\alpha & [1d]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{BE} \left(\left[\begin{array}{c} \text{Thing} \\ \text{Space} \end{array} X \right], \left[\begin{array}{c} \text{Od} \end{array} \right] \right); \left[\begin{array}{c} \text{Time} \\ \text{Od} \end{array} \right] \end{array} \right] \begin{array}{l} [\text{sp-bound axes}] \\ [\text{cross-section}] \end{array}$$

(Jackendoff1996:322)

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-*dasu*”

さらに、構造保持束縛理論による概念構造は、Jackendoff(1991)で提案された概念素性である有界性素性 $[\pm b]$ と概念関数を取り入れることにより、事態、空間、時間の有界性や複数性を相同的に表示している。

例えば、(17a,b)の *roll* は本質的に非有界事象を表す。しかし (17a) は *into over* など行路を有界付ける前置詞によりこの事象全体が有界事象を表しているのに対し、(17b)は *along toward* のような、非有界的な前置詞と共に起しているため、この事象全体も非有界事象を表す。

- (17) a. The cart rolled to NY/ into the house/ over the bridge (in/*for an hour)
 b. The cart rolled along the road/ toward the house
 (*in/ for an hour) (Jackendoff1996:325)

このような事象の有界性の違いは、構造保持束縛理論による概念構造で表記すると、次のように表示される。それぞれ、(18a)は(17a)を、(18b)は(17b)を表す概念構造である。

- (18) a. End-bounded event, path, and time

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} \text{Id} \\ +b \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} \text{Id} \\ +b \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} \text{Id} \\ +b \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE } ([\text{Thing } X], [\text{Space Od}]); [\text{Time Od}] \end{array} \right]$$

- b. Nonbounded event, path, and time

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} \text{Id} \\ -b \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} \text{Id} \\ -b \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} \text{Id} \\ -b \end{array} \right]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE } ([\text{Thing } X], [\text{Space Od}]); [\text{Time Od}] \end{array} \right]$$

(Jackendoff1996:338)

言語科学研究第13号（2007年）

このように有界性素性 $[\pm b]$ を導入した概念構造により、PPの意味の違いによる事象の有界性の変化が明確に表示される。

また、複数性に関して Jackendoff(1996)は、目的語に複数名詞をとる(19a)のような文の解釈には PL 関数が関与しているとし、これを(19b)の概念構造で表示している。これは目的語の複数性が、事象および時間の投射軸も束縛して複数化することをあらわしたものである。なお(19b)では、PL 関数を [PLUR] と表示している。

(19) a. Bill ate apples.

$$b. \left[\begin{array}{ccc} [PLUR]^{\alpha} & [PLUR]^{\alpha} & [PLUR]^{\alpha} \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Sit EAT (BILL, [APPLE]); [TimeOd]} \end{array} \right]$$

(Jackendoff 1996:338)

(19b)の [APPLE] の投射軸上の [PLUR] は、*apples* という名詞の複数形によって導入されたものである。しかし、構造保持束縛理論により、事象軸、時間軸も構造保持束縛され、複数化されている。実際に(19a)では、形態的には現れていないが、明らかに「(リンゴを) 食べる」という事象が複数あることを表しており、それに伴い、その事象が展開する時間も複数でなければならない。

以上のように、構造保持束縛理論による概念構造では、事象の有界性や複数性に関して、動詞があらわす本質的なものだけでなく、PP や目的語の附加による変化も明示的に表示されるのである。

2.6 構造保持束縛理論の改良

Jackendoff(1996)で提案された構造保持束縛理論は、6種類の概念関数は、(8)に示したように「内包関数」と「抽出関数」という逆関数の関係が成立している。また、[nd]の断面(cross-section)を軸(axes)に投射し、[n+1d]の事象や物体に写像するという機能を持つ投射(projection)は、縦の二重線 $||$ で表記されていた。岩本(2001b)は、この「投射」も1つの内包関数の機能であるとし、投射とは逆に、[nd]の事象や物体を[n-1d]の断面に写像する、抽

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-dasu”

出関数の存在を予測した。それをテイル形の進行相を表す関数であるとし、投射関数 PR(projection)の逆関数 CR(cross-section)関数として定義した。これに従い概念関数の表示は、(20)のように従来の縦の二重線[||]の左側に概念関数を附加することによって表示する表記法を採用し、この軸の関数が PR 関数か CR 関数かを区別した。

$$(20) \quad \begin{array}{ll} \text{a. PR} & \text{b. CR} \\ \left[\begin{array}{c} (n+1)d \\ \text{PR} \parallel \\ nd \end{array} \right] & \left[\begin{array}{c} (n-1)d \\ \text{CR} \parallel \\ nd \end{array} \right] \end{array}$$

(岩本2001b:44)

さらに岩本(2001b)は、この表記法を全ての概念関数に適用した概念構造の表記法を提案した。(13)で Jackendoff(1991)による概念構造で表記した、*The light flashed until dawn* をこの方法で表記すると次のようになる。

$$(21) \quad \text{The light flashed until dawn}$$

$$\left[\begin{array}{cc} \left[\begin{array}{c} +b,+i \\ \text{DIM 1dDIR} \\ \text{BDBY}^+([DAWN]) \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} +b,+i \\ \text{DIM 1dDIR} \\ \text{BDBY}^+([DAWN]) \end{array} \right]^\alpha \\ \text{COMP} \parallel & \text{COMP} \parallel \\ \left[\begin{array}{c} -b,+i \\ \text{DIM 1dDIR} \end{array} \right]^\beta & \left[\begin{array}{c} -b,+i \\ \text{DIM 1dDIR} \end{array} \right]^\beta \\ \text{PL} \parallel & \text{PL} \parallel \\ \text{sit FLASH } ([LIGHT]) ; & [T] \end{array} \right] \left. \begin{array}{l} \left. \begin{array}{l} \text{until dawn の概念構造} \\ \text{解釈規則による PL の適用} \end{array} \right\} \right\} \text{The light flashed の概念構造}$$

(上原2002:63)

このように、構造保持束縛理論の概念構造に岩本(2001b)の表記法を導入することで、事象を構成する各要素に係わる概念素性や概念関数と、それらの意味計算の過程を明示することが可能となった。また、それぞれの概念関数が、語

彙的要素によるものか解釈規則によるものかを区別して表記することも出来るようになった。

3 V-*dasu* の概念構造

Jackendoff(1991)は、事象の開始を(22)の概念構造によって表している。

(22) Situation X begin

$$= \begin{bmatrix} +b, -i \\ [\text{DIM } 0(+\epsilon)\text{dDIR}] \\ \text{BD}^- \left(\begin{bmatrix} \text{Sit} & X \end{bmatrix} \right) \end{bmatrix}$$

(Jackendoff1991:37を加筆)⁴

この[X]には、V1事象の概念構造が挿入される。BD⁻は、その項 [X]から[0d]の有界断面を切り取る関数であるため、[X]は[+b] でなければならない。

以上の概念構造を念頭に、1節で提示した分類ごとにV1事象を検討し、V-*dasu* の概念構造を定義していく。

3.1 単数解釈の概念構造

V-*dasu* の単数解釈のV1事象には、(3a)「走る」のタイプと(3b)「太る」のタイプの2種類のタイプがある。次に示す例は、それぞれ、(23a)は(3a)、(23b)は(3b)と同じタイプのV1事象である。

- (23) a. 話しだす，泳ぎだす，踊りだす，(風が)吹きだす，(雨が)降りだす
b. 痩せだす，冷えだす，(洗濯物が)乾きだす

(23a,b)双方のV1事象は、事象の展開が時間的に継続する「過程」があるという点で共通しているが、(23a)と(23b)は、変化の有無で区別される。

まず、(23a)の「走る」などのタイプの事象について、影山・由本(1997)は、(24)のように「一時間」など、時間の幅を表す語と共起可能な動詞は、その

The interpretation of Japanese V-V compound verb "V-*dasu*"

動作の継続期間が「一時間」なのであって、その事象の内的限界点に達したことを表しているのではなく、動作の終了点が区切られていない非有界動詞 (atelic) であるとしている。

(24) 1時間 {走る／話す／泳ぐ／踊る／吹く／降る}

これらの非有界動詞は、本質的に均一な動作の [-b] 事象である。例えば「走る」であれば、その事象が続く限り、どの時点を取り出してみても同じ「走る」という動作の1つの断面が切り取られる。つまりこのタイプの事象は [-b, -i DIM1dDIR] であり、(3a)「太郎が走りだした」の V1 事象「太郎が走る」の概念構造は、(25) となる。

(25) 「太郎が走る」

$$\left[\begin{array}{ccc} [1d, -b, -i]^{\alpha} & [1d, -b, -i]^{\alpha} & [1d, -b, -i]^{\alpha} \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ \text{Sit} & BE ([TARO], [_{Space} Od]) & ; [_{Time} Od] \end{array} \right]$$

この概念構造が、開始の概念構造の V1 事象の部分に挿入されると、(26) となる。

(26) 太郎が走りだした

$$\left[\begin{array}{ccc} [Od]^{\delta} & [Od]^{\delta} & [Od]^{\delta} \\ BD^{-}\parallel & BD^{-}\parallel & BD^{-}\parallel \\ [1d, +b, -i]^{\beta} & [1d, +b, -i]^{\beta} & [1d, +b, -i]^{\beta} \\ COMP\parallel & COMP\parallel & COMP\parallel \\ [1d, -b, -i]^{\alpha} & [1d, -b, -i]^{\alpha} & [1d, -b, -i]^{\alpha} \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ \text{Sit} & BE ([TARO], [_{Space} Od]) & ; [_{Time} Od] \end{array} \right] \left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \\ \\ \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{「ダス」} \\ \\ \\ \text{「太郎が走る」} \end{array}$$

言語科学研究第13号（2007年）

2.3において、「ダス」の概念構造を BD^- であると仮定したが、この概念構造は、 $[1d, -b, -i]$ の V1 事象を COMP が有界化し、その有界断面が開始の限界点であることを BD^- が表示している。 BD^- が適用されるには、 $[+b]$ 事象でなければならない。しかし、「走る」は、 $[1d, -b, +i]$ であるため、COMP の導入によって、有界化されている。この COMP による $[-b]$ 事象の有界化については、Jackendoff(1991)が、開始の反対側の有界断面である *stop*（終了）の概念構造で COMP は *stop* という動詞によって導入されるという見解を示していることからこの COMP による有界化も、事象の「開始」という事象に特徴的な概念であり、V-*dasu* の V2「ダス」の語彙的成分の一部と考えられる。従って、「開始」の概念構造は、(26) に示したように、COMP で有界化された事象の有界断面が、 BD^- によって開始の限界点であると表示されたものなのである。つまり、V2「ダス」の V1 事象は、 $[-b]$ 事象でなければならないということになる。

次に(23b)の「太る」などのタイプの事象は、(27)に示すように、「だんだん」、「次第に」など、変化が漸進的に進行することを表す副詞と共に起ることが出来る。

- (27) 太郎は {だんだん / 次第に} 太った
 花子は {だんだん / 次第に} 痩せた
 ビールが {だんだん / 次第に} 冷えた

森山(1988)は、このタイプの事象を表す動詞句を「進展的永続変化，進展的結果持続変化動詞句」とし、「進展性」を持ち、「過程」の部分が漸次変化を表すとしている。このタイプの動詞の概念構造は、岩本・上原(2003)が二側面動詞の「境界線の位置変化」を表す概念構造の(28)と仮定している。

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-*dasu*”

(28) 境界の位置変化

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} 1d,+b \\ -DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d,+b \\ BDBY+ \left(\left\{ \begin{array}{c} OUTSIDE \\ INSIDE \end{array} \right\} OF X \right) \\ -DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d,+b \\ -DENSE \end{array} \right]^\alpha \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ BE \left([BOUNDARY OF X], [_{Space} Od] \right); & & [_{Time} Od] \end{array} \right]$$

(岩本・上原2003:160)

岩本・上原(2003)は、このタイプの事象において、Xの一回の変化は[+b,-DENSE]⁵事象であることを表しているが、事象が展開する過程において、その変化がX自体を基準として回帰的に適用(投射)される。この作用により、このタイプの事象は、連続的[-b,+DENSE]を表すようになると説明している。

つまり、(3b)「太郎は最近太りだした」のV1事象「太郎が太る」の概念構造は、基本的に(29a)ということになるが、この事象に変化の過程の部分が存在することを表す回帰的事象の概念構造は、(29b)によって表される。

(29) a. 「太郎が太る」(一回的有界事象)

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} 1d,+b \\ -DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d,+b \\ BDBY+ ([OUTSIDE OF (\beta)]) \\ -DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d,+b \\ -DENSE \end{array} \right]^\alpha \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ Sit BE \left([BOUNDARY OF (TARO)^\beta], [_{Space} Od] \right); & & [_{Time} Od] \end{array} \right]$$

言語科学研究第13号（2007年）

b. 「太郎が太る」（回帰的非有界事象）

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} 1d, -b, +i \\ +DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d, -b, +i \\ BDBY + ([OUTSIDE \ OF (\beta)]) \\ +DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d, -b, +i \\ +DENSE \end{array} \right]^\alpha \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ Sit \ BE \left([BOUNDARY \ OF (TARO)^\beta], [_{Space} Od] \right) ; & & [_{Time} Od] \end{array} \right]$$

従って、(3b)「太郎が太りだした」のV1事象を表しているのは、(29b)であり、この概念構造を「ダス」の概念構造のV1事象として挿入することにより、(30)の概念構造を得る。

(30) 太郎が太りだした

$$\left[\begin{array}{ccc} [Od]^\zeta & [Od, +b]^\zeta & [Od, +b]^\zeta \\ BD^- \parallel & BD^- \parallel & BD^- \parallel \\ [+b]^\delta & [+b]^\delta & [+b]^\delta \\ COMP \parallel & COMP \parallel & COMP \parallel \\ \left[\begin{array}{c} 1d, -b, -i \\ +DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d, -b, -i \\ BDBY + ([OUTSIDE \ OF (\beta)]) \\ +DENSE \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d, -b, -i \\ +DENSE \end{array} \right]^\alpha \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ Sit \ BE \left([BOUNDARY \ OF (TARO)^\beta], [_{Space} Od] \right) ; & & [_{Time} Od] \end{array} \right]$$

このように、V-*dasu* は、COMPによって有界化された有界断面をBD⁻が開始の限界点として取り出すという形で表される。つまり「開始」を表す概念構造は、[-b, DIM1d]の事象に対して適用されるのである。

The interpretation of Japanese V-V compound verb “V-dasu”

4. 複数解釈の概念構造

4.1 複数期間反復の開始と単一期間反復の開始

(4)の複数期間反復と(5)の単一期間反復は、どちらも同一事象の繰り返しを表すものであるが、(4)が複数期間反復の開始と解釈されるためには、必ず「毎日」「毎朝」など定期的な習慣的動作を表す語彙的成分と共起しなければならないのに対し、単一期間反復はこの種の語彙的成分と共起することが出来ない。

- (31) a.* 風で毎日ブランコが揺れだした
b.* 毎朝小刻みに体が震えだした

これは、(4)と(5)では V1 事象の内部構造が異なり、(5)のタイプの V1 事象は、習慣性を表す「毎日」や「毎朝」などの語彙とは相容れないためである。

まず、(4)の複数期間反復の開始を表す V1 は、(3a)と同じタイプの事象であるが、この V1 事象は「毎日」「毎朝」という定期的な繰り返しを表す語彙的成分によって、事象項と時間項に PL が適用される。しかし、V1 そのものは [-b] 事象であるためそのままでは PL を適用することは出来ず、解釈不能に陥ってしまう。そのため、1 回の事象の量を規定するため、解釈規則によって COMP が適用され、V1 事象が [+b] 事象に変換される(上原2003)。なお、この事象は、毎日同じの空間で展開されると解釈されることから、空間項には PL は適用されない。以上の解釈より、(4a)の概念構造は、(25)の概念構造に、COMP と PL が適用された上に「ダス」の概念構造が適用された次のようになる。

言語科学研究第13号（2007年）

(32) 太郎は毎日ジムで走りだした

$$\left[\begin{array}{ccc}
 \left[\begin{array}{c} [Od, +b, +i]^{\zeta} \\ BD^{-} \parallel \\ [1d, +b, +i]^{\delta} \\ COMP \parallel \\ [1d, -b, +i]^{\gamma} \\ PL \parallel \\ [1d, +b]^{\beta} \\ COMP \parallel \\ [1d, -b]^{\alpha} \\ PR \parallel \\ Od \\ \text{Sit} \quad BE \quad ([TARO], [_{Space} Od]) ; [_{Time} Od] \end{array} \right. & & \left. \begin{array}{c} [Od, +b, +i]^{\zeta} \\ BD^{-} \parallel \\ [1d, +b, +i]^{\delta} \\ COMP \parallel \\ [1d, -b, +i]^{\gamma} \\ PL \parallel \\ [1d, +b]^{\beta} \\ COMP \parallel \\ [1d, -b]^{\alpha} \\ PR \parallel \end{array} \right] \\
 & & \left. \begin{array}{c} \text{「ダス」} \\ \text{複数回} \\ \text{解釈規則による有界化} \\ \text{「太郎が走る」} \end{array} \right\}
 \end{array} \right]$$

なお、(25)では空間項に BD^{-} が適用するのに対し、(32)では適用しない。これは、(25)では、事象の開始点が空間の開始点と解釈されるが、(32)では空間の開始点は特定されず、「太郎が走る」という事象が毎日一定の量行われる空間があることのみを意味するためである。

一方、(5)の単一期間反復の開始を表す V1 事象の「揺れる」「震える」は、同一動作が反復し続けることを表す、 $[-b, +i]$ 事象である。吉川 (1971/1976) は、このような事象を継続とは区別して、「連続」と表現している。つまり(5)の V1 は、 $[+b]$ 事象が内的限界点を持たずに反復すると捉えられることでその語彙的意味を実現する動詞であり、同一動作の連続性が非有界的な $[-b, +i]$ 事象と解釈されるのである。従って(5)の V1 は、語彙的に複数事象を表す動詞と考えられる。つまり、このタイプの動詞は、本質的な意味に事象の反復、つまり事象の複数性が含まれているため、語彙的成分の一部に PL による事象の複数化が含まれていると考えられる。ただし(32)と同じように、「ブランコが揺れる」という事象は、同一の空間で展開されるため、空間項には PL 関数は適用されない。従って「ブランコが揺れる」の概念構造を次のようなものと考

The interpretation of Japanese V-V compound verb "V-*dasu*"

える。

(33) ブランコが揺れる

$$\left[\begin{array}{ccc} [-b, +i]^{\beta} & & [-b, +i]^{\beta} \\ PL\parallel & & PL\parallel \\ \left[\begin{array}{c} 1d, +b, -i \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} & \left[\begin{array}{c} 1d, +b, -i \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} & \left[\begin{array}{c} 1d, +b, -i \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ \text{Sit} \quad BE \left([BURANKO], [_{Space} Od] \right); [_{Time} Od] & & \end{array} \right]$$

そして(5a)の概念構造は、この概念構造に直接「ダス」の概念構造が適用され、次のように表される。

(34) 風でブランコが揺れだした⁶

$$\left[\begin{array}{ccc} [Od]^{\delta} & & [Od]^{\delta} \\ BD^{-}\parallel & & BD^{-}\parallel \\ [+b]^{\gamma} & & [+b]^{\gamma} \\ COMP\parallel & & COMP\parallel \\ [-b, +i]^{\beta} & & [-b, +i]^{\beta} \\ PL\parallel & & PL\parallel \\ \left[\begin{array}{c} 1d, +b \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} & \left[\begin{array}{c} 1d, +b \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} & \left[\begin{array}{c} 1d, +b \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ \text{Sit} \quad BE \left([BURANKO], [_{Space} Od] \right); [_{Time} Od] & & \end{array} \right] \left. \begin{array}{l} \left. \begin{array}{c} \left. \begin{array}{c} [Od]^{\delta} \\ BD^{-}\parallel \\ [+b]^{\gamma} \\ COMP\parallel \end{array} \right\} \right\} \text{「ダス」} \\ \left. \begin{array}{c} [-b, +i]^{\beta} \\ PL\parallel \\ \left[\begin{array}{c} 1d, +b \\ +DEN \end{array} \right]^{\alpha} \\ PR\parallel \end{array} \right\} \right\} \text{「ブランコが揺れる」} \end{array} \right\}$$

4.2 多発的事象の開始

V-*dasu* が多発的事象の開始と解釈される場合、V1事象は変件事象であり、森山(1988)は「主体変化一点的」、工藤(1995)は「ものの無意志的な変化動詞」で、内的限界動詞であるとしている。つまり、持続する「過程」が無い[+b]

言語科学研究第13号（2007年）

の変化事象である。従って、V1事象の概念構造は(35)のようになる。

(35) 「子供が死ぬ」

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} 1d + b \\ -DEN \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d + b \\ BDBY + ([DEAD]) \\ -DEN \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d + b \\ -DEN \end{array} \right]^\alpha \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ \text{[Sit BE } ([CHILD] , [Property Od]); & & [Time Od] \end{array} \right]$$

さらにその変化は、永久的なものと捉えられているため、同一の主体に対して繰り返し適用されることが出来ない。従って、主体が単数であれば、主体の状態変化が終了した時点でその事象は終了してしまうことになる。しかし、V-dasu は事象の終了点を含まない表現であるため、概念的に不整合な表現となってしまう。この不正合性を回避するために主体が複数存在し、その複数主体に対して同一事象が発生し続けるという解釈が強制されることになる。このタイプの事象は、上原(2002)が、テイル形の反復解釈の一種、「配分」の「主体が異なるケース」として(36)のような概念構造を示している。

(36) 子供が次々と学校に到着している

$$\left[\begin{array}{ccc} [Od]^\gamma & [Od]^\gamma & [Od]^\gamma \\ CR\parallel & CR\parallel & CR\parallel \\ [1d, -b, +i]^\beta & [1d, -b, +i]^\beta & [1d, -b, +i]^\beta \\ PL\parallel & PL\parallel & PL\parallel \\ \left[\begin{array}{c} 1d + b \\ -DEN \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d + b \\ BDBY + ([SCHOOL]) \\ -DEN \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} 1d + b \\ -DEN \end{array} \right]^\alpha \\ PR\parallel & PR\parallel & PR\parallel \\ Od & & \\ \text{[Sit BE } ([CHILD] , [Space Od]) ; & & [Time Od] \end{array} \right]$$

(上原2002:130)

言語科学研究第13号（2007年）

この解釈を得る事象の概念構造も、属性項は、[DEAD]によって限界づけられ、それ以上の投射はしない⁷ことと、解釈規則により導入された PL 関数は、主体項も複数化するという特徴がある。

最後に「点く」に関して、電灯などは同一のものが点いたり消えたりすることは可能であるが、「点く」という動詞のみでは「消える」などの還元的な事象を含まないため、「点く」と「死ぬ」と同様の概念構造で表される。

5. まとめ

本稿は、V-*dasu* の解釈には、単数解釈および3タイプの複数解釈(複数期間反復の開始、単一期間反復の開始、多発的事象の開始)があることを提示し、構造保持束縛理論の枠組みを用いて、それぞれの解釈を得る概念構造を示したものである。上記の V-*dasu* の複数解釈は、いずれも V1 事象が有界性事象の場合に強制的に得られるものである。本稿における V-*dasu* の解釈の分類は、V1 事象の分類を、事象アスペクト解釈の、有界性、過程、変化などの概念に基づいて行ったものである。これに対し、金田一(1950/1976)の動詞分類による、V1 事象の分類に基づいた先行研究の見解は、V-*dasu* の解釈うち、実際に可能な解釈の一部分にのみ言及したものであったと言える。

V2「ダス」を表す概念構造は、まず COMP が V1 事象を有界化し、その有界断面を BD⁻が切り取るという、2つの関数の機能から構成されている。これを V1 事象の概念構造に適用すると V-*dasu* の概念構造が得られる。しかし、COMP は [-b] 事象にのみ適用されることから、V1 が [+b] 事象の場合、直接 V1 事象の概念構造に適用することができない。このような場合、語彙的要素や解釈規則によって PL が適用され、[+b] 事象が [-b,+i] 事象に転換されることで、意味計算の整合性が得られる。これが複数解釈のメカニズムである。また、PL によって複数化される対象は、V1 の事象タイプによって異なるが、構造保持束縛理論による概念構造は、この意味計算の過程を明示的に記述する事が可能であり、V-*dasu* の主体数と事象数を決定する要因が、V1 事象のアスペクト特性と密接に関わっていることに対し、説明力のある説明がなされた。本稿の試みから、この理論を日本語のあらゆる事象アスペクト分析に応用する可能性が示されたと考える。

The interpretation of Japanese V-V compound verb "V-*dasu*"

[謝辞]

本稿は、服部(2005)の第2部(第3章～第5章)を加筆・修正したものである。本稿の執筆にあたり、ご指導いただいた岩本遠億先生に感謝申し上げたい。また、たくさんの示唆に富むコメントを下さった査読の先生方に御礼申し上げたい。

[注]

- 1 「統語的複合動詞」という分類は影山(1993)によるものである。従って、長嶋(1976)、寺村(1984)見解は、影山(1993)の基準により分類されたものに対するものではないが、実質的に同じものを対象としているため、ここに含める。
- 2 金田一(1950/1976)の分類による。
- 3 BDBYの扱いについて、Jackendoff(1991)は、BDBYを「関数」と定義しているが、岩本(未刊行)は、COMP関数の素性であるとしており、筆者は、岩本(未刊行)の見解が、BDBYの機能を正しく捉えたものであると考える。これは、関数には素性変換もしくは、次元性の変換の機能が無くてもならないが、BDBYにはそのような機能はなく、[+b, -i DIM1dDIR]の有界断面の属性を示すものであり、関数の機能ではないと考えられるためである。
- 4 Jackendoff(1991:37)は、事象の終了の概念構造を次のように示し、開始はこのBD⁺がBD⁻と置き換えられたものであるとしている。

$$\text{Situation X finishes/ ends} = \left[\begin{array}{c} +b, -i \\ [\text{DIM } 0(+\epsilon)\text{dDIR}] \\ \text{BD}^+ \left(\left[\begin{array}{c} \text{Sit} \\ \text{X} \end{array} \right] \right) \end{array} \right]$$

- 5 稠密性(density)とは、Jackendoff(1991)の「所有」領域の位置変化の連続性の指摘によるものである。Iwata(1999)において、その変化の稠密性の有無を表す[± DENSE]という素性が導入された。稠密性と事象アスペクト構造の関係については、岩本(2001a)で詳細に議論されている。
- 6 筆者はアスペクト解釈にはデ格の有無は係わらないと考えるため、概念構造には表示していない。
- 7 岩本・上原(2003)で、[DEAD]によって限界づけられた変化は、その時点で限界に達したことを表し、これ以上の投射は概念上不可能であると説明している。

言語科学研究第13号 (2007年)

[参考文献]

- Iwata, Seizi (1999) Thematic parallels and non-parallelisms: contribution of field-specific properties. *Studia Linguistica* 53(1), 68-101.
- Jackendoff, Ray (1991) Parts and boundaries. In *Lexical and conceptual semantics*, Beth Levin and Steven Pinker (eds), 9-45. Cambridge, Mass.: BlackWell.
- Jackendoff, Ray (1996) The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.
- 岩本遠億 (2001a) 「空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について」『言語科学研究』第7号 13-41 神田外語大学大学院
- 岩本遠億 (2001b) 「進行相と二格後置句の認可について—概念意味論による接近法—」研究報告『先端言語理論の構築とその多角的実証 (5)』(COE 形成基礎研究費) 神田外語大学33-60
- 岩本遠億 (未刊行) 『事象概念構造と日本語のアスペクト』
- 岩本遠億・上原由美子 (2003) 「結果の『ている』の概念構造」『Scientific Approaches to Language Vol.2-135-169 神田外語大学言語科学センター
- 上原由美子 (2002) 『テイル文の概念構造』修士論文 神田外語大学
- 上原由美子 (2003) 「テイルの反復解釈について」『言語科学研究』第9号 55-79 神田外語大学大学院
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』日英比較選書8 研究社出版
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15号 (金田一 (編) 1976に所収)
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時の表現』ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」『日本語の語彙と表現 日本語講座第四巻63』大修館書店
- 服部葉子 (2005) 『複合動詞 V+ダスの解釈の決定要因』修士論文 神田外語大学
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 吉川武時 (1971) 「現代日本語のアスペクトの研究」(金田一 (編) 1976に所収)